

〈教育口演〉

NIET の治療対象は、根管の中の何か？

牧 和宏・星野悦郎・宅重豊彦

Kazuhiro MAKI Etsuro HOSHINO Toyohiko TAKUSHIGE

3Mix-MP 療法の概念が変わりました。

今までは生活歯と失活歯を明確に分けて、それぞれ Save-Pulp 療法、NIET と称してきました。しかし今後は、両者の垣根が取り払われて一括して「3Mix-MP 法 Save 治療」として扱われることとなります。その根拠を示します。

かつて、従来法で抜髄して根充した歯を病理標本にして観察したところあちこちに歯髄細胞が残っていました。知覚等の歯髄組織としての役割は果たせないかも知れませんが、細胞レベルで歯髄は生き残っているのです。したがって、根管内の細菌を殺してきた NIET はこの生き残った歯髄細胞を助ける治療だったのです。そう！ Save-Pulp 療法そのもの。だからこそ NIET も Save-Pulp 療法も今まで同じ治療方法だった、とも言えます。

「SavePulp療法」と「NIET」

	Save Pulp療法	NIET
治療の概念	生きている歯髄組織の無菌化	感染根管の無菌化
治療目的	生きている歯髄細胞の救助	根管内の炎症を抑えることで歯周組織の炎症を抑制し、歯を救済
名前の由来	治療対象	治療手段(どうやって・・・)
新たな概念	抜髄歯の根管の中にも歯髄細胞は生存している	
治療方法	無菌化	

次に、無菌化され助かった歯髄細胞はその後どうなるのか。三つの転機が考えられています。そのまま生き続ける場合が一つ。分化増殖して行くケースが二つ目。三つ目が apoptosis です。前者の二つは理解できるでしょう。問題は3番目です。

死んでしまった歯髄細胞はその後どうなるのでしょうか。死んだ細胞の周囲に免疫細胞が居ればその死骸

は食食分解されてしまい、その後新たな幹細胞系の流入が起こり歯髄あるいは歯髄様組織の再生が起こります。免疫細胞が居なければ細胞の死骸が核となって石灰化が起こるわけです。つまり無菌化さえ達成できていれば、生体は状況に応じて軟組織か硬組織のどちらかの治癒形態をとるのです。そしてこれこそが LSTR そのものです。

表. 適応症の決定

炎症の大きさ 病巣の位置	Simple法	Save法	サラ法
象牙質の中 ～ 歯髄腔の一部	う蝕処置 ・自覚症状なし。	・自覚症状あり。	・咬合痛の既往と継続
歯冠歯髄腔にある。	慢性歯髄炎	・自発痛がある。	・露髄症例 ・重篤な歯髄炎症状
歯根歯髄腔にある。	慢性Perもどき ・予防的無菌化处理	・X線写真で異常はないが、痛みがある。	・さわれない程の激しい痛み ・繰り返す咬合痛
歯根膜にある。	慢性根尖性歯周炎 ・自覚症状がないが、X線像として軽度の歯根膜腔の拡大) /びまん性の歯槽骨吸収像	慢性根尖性歯周炎 ・自覚症状がある。 ・瘻孔、膿瘍の形成	・急性炎症 ・腫脹を伴う。

* 当然ながら、境界にある症例もある。それらの症例は、安全策を採るべき。

最後に 3Mix-MP 法 Save 治療の分類について述べます。

まず最初に病巣のある位置による分類があります。象牙質および歯冠歯髄にある場合は「歯冠歯髄 Save 治療」と、称します。歯根および歯根膜まで病巣が進展している場合は「歯根歯髄 Save 治療」となります。

次に、病巣の大きさや重篤度に応じて「Simple 療法」「Save 療法」「Thorough (サラ) 療法」と分類されます。例えば「歯冠歯髄 Save 治療 Simple 療法」「歯根歯髄 Save 治療サラ療法」と言った具合になる訳です。略して「歯根歯髄 Save 法」とか言ってもいいでしょう。

今まで我々がやって来た治療法は 2 回貼薬が中心の「Save 療法」です。新しい概念でもやはり「Save 療法」が中心で、難易度に応じてその前後に「Simple 療法」と「Thorough (サラ) 療法」がきます。「Simple 療法」はその名の通り簡単な症例、3Mix-MP 法を必要としない様な症例に対し 1 回貼薬で済ませてしまうやり方です。一方「Thorough (サラ) 療法」は非常に重篤な症例に対してとる治療法です。その特徴は Save 法を施すための事前準備が必要だ、と言う点です。この事前処置は消炎処置としての貼薬や咬合調整など様々です。そしてさらに、Save 法で治療が終了した後に発病の原因となった物の排斥のための事後処置をも必要とします。この様に「首尾一貫した徹底的」な治療がサラ法の名前の由来でもあります。